文芸科と現代文化学科の日々

大塚明子

八年前の春、私は文芸科の専任講師に採用して頂き、社会人としての第一歩を踏み出しました。それからの年月、いろいろなことがあったけれど、本当にあっという間だった気がします。

着任した当初、改称する前の文芸科は、今よりかなり国文科的な香りの高い学科でした。社会学の大学院を出たばかりの私には、とても新鮮に映ったのを覚えています。

最初の教室会議だったと思いますが、文芸学会・文芸科賞・文藝論叢が当科の三大行事だと教わりました。その後ひとつずつ経験していく中で、やはり一番興味深かったのは、完全な門外漢である文芸科賞。小説、詩、童話など…正直、作品としての質は、素人読者の目には「?」と思うものが多かったのですが(応募者の皆さん、ごめんなさい。でも、とても面白いのもありました)、渦巻く心の中から言葉や物語が紡がれてくる、その生々しいエネルギーが印象的で、感動的な体験でした。

また週一回、15~16人という少人数の2年ゼミ。アニメ、ゲーム、音楽などなど様々な発表があり、未知の世界をいろいろ教えてもらいました。生まれて初めてテレビゲーム機を買ったとか、ゼミ生の影響で始めた趣味もけっこうあります。皆でカラオケをしたり、ビジュアル系やジャニーズ系のライブに連れて行ってもらったりといった思い出も…。

現代文化学科はあって当たり前のもの…

そうした感覚があったので、募集停止が最終的に決まった後、かなり寂しい思いをしました。教員として、また科の一員として、どれほどのことをしてきたかを考えると、正直かなり忸怩たる思いがあります。四月からは人科に異動となり、あと1年は非常勤として当学科に出講することになります。二年生の皆さんと、後悔しないように精一杯、楽しく過ごしていきたいと願っています。